WEP

VOL. 110
ウエップ
俳句通信

俳句通信

特別作品25句　星野恒彦「木の匙」

特集〈この1年の私の3句 その自解〉

石　寒太　神田ひろみ　鳥居真里子　村上鞆彦
今井　聖　小林貴子　林　桂　望月　周
遠藤由樹子　しなだしん　広渡敬雄　柳生正名
大石雄鬼　高柳克弘　坊城俊樹
押野　裕　谷口智行　松岡隆子
鎌田　俊　辻内京子

【COLOR PAGE】
イタリア吟行1
ローマ～ペルージャ
イタリア吟行2
ペルージャ～オルチャ渓谷
～フィレンツェ

【新作30句】菅野孝夫「亀の子束子」
【特別寄稿30句】吉岡桂六「八重桜満開」

●作品●田中水桜・下鉢清子・船越淑子・安西　篤・高橋さえ子・草深昌子・矢野景一・遠藤由樹子・磯　直道・
檜　紀代・大橋　晄・伊藤晴子・飯野幸雄・伊藤政美・池田尚文・すずき巴里・渡辺徳堂・広瀬恵美子・
稲田眸子・三浦亜紀子　ほか

夏蝶と並ぶ一瞬北の旅

鈴木六林男

蝶が離れない

山上湖で釣りをしていると、メジロやシジュウカラ、鶯など野鳥が近くにやって来る。そんな時、迷彩柄のシャツなどを着ていると更に近くにやって来て囀る。

ある日、そのシャツに蝶が肩や腕に止まり離れない。追い払ってもすぐに戻って来る。別に悪い気はしないがこのまま一日中纏わりついて居て大丈夫なのかと思い、このシャツの上にコートを羽織ってみたら蝶はどこかへ飛んで行った。いざ居なくなると残念な気もしたがほっと安堵した。

プリント柄が蝶を惹きつけるのではないかと思い調べてみた。蝶は紫外線が見え、羽根には人間には見えない雌雄異なった紫外線の柄があり、雌雄を識別をしているようで、このシャツには雌に見える紫外線の柄が印刷されていたようだ。

後日、このシャツをもう一度着てみたがやはり蝶は纏わりついて離れなかった。

絵・文　杉原武弘

イラスト　田中丸葉子

麦の秋（むぎあき）

文鎮の青錆そだつ麦の秋　木下夕爾

能登麦秋女が運ぶ水美し　細見綾子

麦秋の子がちんぽこを可愛がる　森　澄雄

わたしが20歳になるころまで家には畑がふたつあった。家のすぐ前、そして300mくらい歩いた裏の方に。農家出の母は、ひとりでふたつの畑を耕していて、裏の畑では時期になると麦を作った。6月ごろになると、畑一面が明るい黄色になったものだ。

町の区画整理が昭和30年代にあって、多くの田畑が住宅地になり、わたしの家の畑も住宅地になった。それで地元で麦秋の風景を見ることはなくなり、近ごろは、機会をみて栃木県あたりまでその景色を見にいっている。利根川、渡良瀬川を越えたあたりからひろびろとした麦秋の景がひろがり、晴れた日でも曇りの日でもそれぞれの趣をみせてくれる。

俳句を作るようになって、結構、麦秋の句を詠むようになったが、たいていは栃木の景、あるいは頭の中に棲みついている麦の秋の景である。

（大崎紀夫）

特別作品25句

木の匙

星野恒彦

青芝に尺蠖（しゃく とり）めけるヨガ一団

さざ波たつ葉叢に載れる大牡丹

ぼうたんや花弁よりさき蕊くづれ

たれたれとなってぱらぱら散る牡丹

夕闇にとけ入るきはの花あふち

珈琲の香へ梅雨の傘たたみ入る

この一年の私の3句その自解

いまどのような俳句が作られているのか。
20人の俳人にこの一年間の作の中から3句を選んでいただき、
その作句の姿勢、作句に対する思いなどを含め、
それぞれ自解していただきました。

石　寒太　　谷口智行
今井　聖　　辻内京子
遠藤由樹子　鳥居真里子
大石雄鬼　　林　　桂
押野　裕　　広渡敬雄
鎌田　俊　　坊城俊樹
神田ひろみ　松岡隆子
小林貴子　　村上鞆彦
しなだしん　望月　周
髙柳克弘　　柳生正名

無常は何処からどこへ（その2）

西池 冬扇

第10章　現代の無常から未来の非情へ

10―1　無常を愛する俳人たち

○桜の無常

元号平成が終わる年（2019年）の春は、桜の美しい期間が殊のほか長かった。ちょうど開花時期に寒い日が続いたからである。花冷えの夜は暖房を入れても、何にとはなしに心がさわぐ。さまざまな桜の句を思い出してみたのも、そういう夜のなせるわざだろう。

桜をテーマとした句の趣はさまざま、いくつかの範疇に分かれる。古典的な雅の世界を詠うあり、対照的に庶民の哀歓を描いてみせるあり、あるいは、ひたすらにその美しさを写生するあり、等々である。

やはり、在原業平の〈世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし〉がいみじくも詠うように、桜は心をあれこれ不思議に騒がすものなのであろう。その騒がせ方も、俳句の場合は、恋心や敷島の大和心が騒ぐというより、命の儚さと有限性、世の移り変わり、時の移ろいを我が身に照らしてに心を騒がせる、という句が目につく。いわば無常というべき趣を伴う。

世に桜の句として人口に膾炙する近世の俳諧も多くはその趣の句だ。（どちらかというと私は〈木のもとに汁も膾も桜かな〉のような、明るく楽しい句が好きなのだが。）

さまざまのこと思ひ出す桜かな　松尾芭蕉
散る桜残る桜も散る桜　良寛
死支度致せ致せと桜哉　小林一茶

もちろんこの傾向は戦後の俳人でも共有されている。いくつか思い出すまま、あげてみる。

人の世のかなしき櫻しだれけり　久保田万太郎
花あれば西行の日とおもふべし　角川源義
夜桜に歩きて誰も明日知らず　西村和子

超結社句会／新12番勝負

前列右から菊田氏、大石氏、上野氏
後列右から星野氏、藤本氏

ゲスト　上野一孝・大石香代子
菊田一平
ホスト　星野高士・藤本美和子

編集部　超結社句会第51回目です。ゲストは「梓」代表の上野一孝さん、「鷹」同人の大石香代子さん、「や」「晨」同人の菊田一平さん、あと、お一人参加してくださる予定でしたが、ご都合により欠席となりました。いつもは7句選ですが、本日は5人となりましたので、6句選です。ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願いします。

高士　今日は点が割れました。点の入っていない句が少ないですね。まず、3点句。

節つけて本読む子ども桐の花　（王菊）

一孝　桐の木は「子ども」が生まれた時に植えて箪笥にするとか言われている木で、その「桐の花」と「子ども」の取り合わせのよろしさで、頂きました。

一平　「桐の花」がいいですね。「節つけて本読む子ども」は、みなさん経験があることで、違和感なく受け入れられますよね。そこに「桐の花」を持ってきた色相がとてもいいと思いました。

高士　わたしも頂きました。「桐の花」が淡い感じで、上に咲いている花ですね。淡さと勢い。代々つたわる家系の豊かな